

日本海藻協会ニュース

大野正夫先生（高知大学名誉教授）よりご寄稿いただきました。

徳島県におけるアオノリ、ワカメ・コンブ研究の総括的成果の報告書の紹介

高知大学名誉教授 大野正夫

徳島県の養殖ワカメの生産量は三陸海域には及ばないが、鳴門海峡の潮流が良質なワカメをはぐくみ、江戸時代から灰干し処理した乾燥わかめが、鳴門わかめ特産品とされているが、原料不足から貨車で三陸地域からワカメ原藻が送られてきたものを、鳴門で加工した時代もあり、このことが徳島県にわかめ問屋が多い歴史的背景にもなっている。また、吉野川の天然アオノリは、かつて四万十川の天然アオノリに次ぐ生産量を上げていた。しかし、1970年代は、天然アオノリの生産が皆無に近いほどに減産し、河口域で行われていたヒトエグサ漁場で、アオノリの養殖を試みると、十分に生育した。現在ではかなり上流の吉野川大橋付近が、主要なアオノリ養殖場となっている。養殖アオノリの生産は順調に伸びて品質も最良であり、現在の年間生産量は80～100トン（乾燥）に達し、スジアオノリとしては日本の最大生産地で、その年の青海苔の価格を左右させている。

徳島県では、ノリ、テングサ、ヒジキも全国的に良質な製品が出荷されてきた。これらの海藻の品質向上と新しい養殖法が開発されたのは、歴代の徳島県水産試験場・鳴門分場の海藻部門担当者が、精力的にこれらの海藻に取り組んだ成果である。鳴門分場は海藻増養殖研究の拠点であったが、鳴門分場施設は、改築するにあたって全国でもめずらしい海藻を柱とする研究施設になり、さらに水産研究部門を統括する徳島県水産研究所となった。初代所長の松岡正義氏は初めて徳島県にコンブとアオノリの養殖の導入を行い、前所長の團 昭紀氏は、アオノリ養殖の人工採苗技術の事業化から、吉野川の養殖アオノリを日本最大の生産地に導いた。さらに彼はワカメの品質改良試験によって、輸入ワカメに対抗して鳴門ワカメ生産を維持してきた。

このたび、團 昭紀所長の定年退職記念に合わせて、お二人の研究業績が総説として、徳島県立農林水産総合技術支援センター（新組織に改変）、水産研究課研究報告、第10号（2015）に掲載されている。

團 昭紀：アオノリ類の生理、生態からみた養殖技術の検証（15～24 頁）では、次のように報告されている。アオノリ葉体を細断させることにより、いつでも胞子を得ることができることの生物学的解明から、人工種苗生産技術、アオノリ種網の保存まで、安定したアオノリの養殖を可能にした。多くの応用藻類研究者には、これらの技術を他の種でも試みることで、新しい海藻養殖を開発ができるであろう。

團 昭紀・大野正夫・松岡正義：徳島県のワカメとコンブ資源の開発研究の変遷（25～48 頁）では、鳴門ワカメの品質的な特性と鳴門式養殖法、特に夏期陸上培養の歴史的な変遷が記載されている。鳴門ワカメの品種改良、養殖と加工は、三陸地方とは異なるアイデアでなされている。コンブ養殖は、今は暖海海域でも行われているが、北海道からの種苗による養殖は、先駆的な試験研究であった。しかも製品は北海道産昆布より柔らかく、用途も開けており、生産の拡大はあまりないが、20 年を経た今日でも養殖が行われており、コンブ類の成長や品質を比較検討するためには貴重な資料であろう。

これらの報告は、電子公開されており、下記のインターネットのホームページで、検索できる。
<http://www.pref.tokushima.jp/tafftsc/suisan/result/bulletin/>
を検索して、研究報告第 10 号を開くと全文が掲載されているのでご紹介する。